# バレーボール授業における学習者の認識に関する研究

藤山 健太　（東京学芸大学教職大学院）

## １．目的

本研究の目的は，体育授業のバレーボールにおいて，学習者はゲームの意味を認識することで，どのような戦術の獲得・習熟を目指し，どのように検証しゲームを進めていくのかという認識について明らかにすることである．

## ２．研究方法

１）対象者：都立 M 中等教育学校１年生女子 86 名，２年生男子 79 名，４年生女子 76 名

２）調査方法：単元前後の質問紙調査と１年生の毎授業における学習感想文

３）分析方法：IBM SPSS Statistics29 を用いて統計分析．自由記述の内容にコードをつけ，類似するもの同士をカテゴリーとして生成．学習感想文にみられる認識対象にコードをつけ，授業時数ごとに学習者が認識の対象としていたことについて分析．

## ３．結果と考察

１）　実践後の意識について学年間で一元配置分散分析を行った．その結果，学習者が楽しいと捉える戦術や技能は異なることが明らかとなった．このことから，学習者によって身につけようとする戦術は異なってくると推察された．

２）　意識調査における自由記述分析では，学習者は「得点する」という目的に向かって「中心的な運動課題」「運動課題を合目的的に達成していく戦術の獲得・習熟」「意図的・選択的な判断」「自分たちの実態」の４つを主に認識していることが明らかとなった．

３）　また，学習者は攻撃の組み立てを「リズムをつくること」だと捉えていた．考察を進めると，守備場面では相手チームのつくるリズムに共感し，相手の動きを先取りしながら守備を行うこと，攻撃場面では相手がリズムを組み立てていく姿に自分たちの運動感覚を重ね，共感しながら自分たちの攻撃の有効性について評価していることが推察された．このことから，バレーボールには２つの共感が発生しており，学習者のリズムの捉えは２チーム間で循環すると考えられた（図１）．

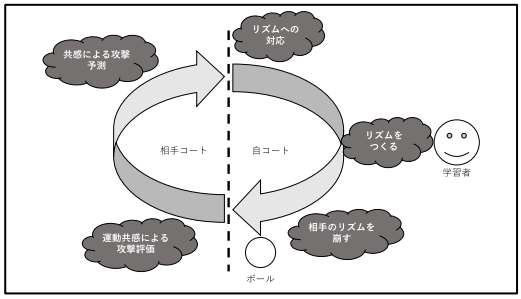


図１　学習者のリズムの捉え

４）　２つの共感に着目すると，バレーボールでボールは必ず，対戦している２つのチーム間を行き来することから，そこには両チームとボールを結ぶ「原象徴的三角形」が常に現れると考えられた．さらに，リズムが両チーム間で循環していることから，２チーム間にはリズムの共有が生じていることが推察された．これらのことより，バレーボールでは常に共視が発生し，攻撃はこの共視を壊そうとする行為であり，守備は共視状態を保とうとする行為であると捉えられることが示唆された．そして，共視の状態は２チーム間のリズムの共有によって生じていることから，学習者は戦術の獲得・習熟に向けて，リズムに関する認識を獲得していたと考えられた．

## ４．結論

本研究では，学習者は，学年によって異なる認識を示すこと，「中心的な運動課題」「運動課題を合目的的に達成していく戦術の獲得・習熟」「意図的・選択的な判断」「自分たちの実態」の４つを主に認識していること，さらに，リズムに関する認識を獲得していることが明らかとなった．

## ５．主な参考文献

１）北山修（2005）共視論 母子像の心理学．講談社．